

日光を国際エコリゾートに 価値向上を目指す観光戦略

1929年の日光線開通以来、東武鉄道は日光エリアの活性化に注力してきた。年間約1,000万人が訪れる世界的観光地に成長したこの地を国際エコリゾートとして醸成させるため、地域と共に様々な施策を展開する。

日光は世界文化遺産に登録された「日光の社寺」、ラムサール条約の登録湿地である「奥日光の湿原」といった多様な観光資源に恵まれている。国際的な観光都市としての始まりは明治時代で、滞在型リゾートとして多くの観光客が訪れた。荘厳な社寺や奥日光の雄大な自然に魅せられた外国人が紀行文やガイドブックを記し、「NIKKO」の名は世界に広まった。

日本最古のリゾートホテルと言われる「日光金谷ホテル」は1873年に

開業した。英国をはじめ各国の王族、物理学者のアルベルト・アインシュタイン、社会福祉活動家のヘレン・ケラーなど、宿帳には著名人の署名が数多く残る。

老舗リゾートホテル、復活

日光金谷ホテルの人気は続いたが、バブル崩壊後に債務超過の状態に陥った。日光金谷ホテルと中禅寺金谷

ホテルを運営する金谷ホテル株式会社の再建のため、地元の足利銀行を中心にファンドが形成され、経営基盤を改めて構築した。

その後、東武鉄道に金谷ホテルの株式取得の話が持ち掛けられた。日光エリアの発展に貢献し続け、栃木県や地元日光の行政、金融機関、企業からの信頼も厚いことから、このクラシックリゾートホテルの未来が託された。東武鉄道は2016年9月30日、金谷ホテルの株式を取得し連結子会社とした。そこにあるのは「地元の貴重な観光資源であり、宝でもある老舗ホテルを守りたい」という強い想いだった。

最初に取り組んだのが設備投資だ。登録有形文化財に指定されている建物は改築に制約がある上、経営的に厳しい時代が続いたため、施設の維持管理は必要最低限にとどめられていた。創業150年を迎えた2023年に別館(1935年建設)をリニューアルし、「別館ROYAL HOUSE」としてオープン。館内はクラシックで重厚な雰囲気を保ちつつ、明るくモダンなデザインを施した。

レストランでは石蔵の中から発見

された昔のレシピ集から、各時代のメニューを復刻していた。約100年前のレシピをアレンジした「百年ライスカレー」は、今でもホテルの名物だ。こうした食を目的とする訪問客も多い。建物や食事を通じて歴史を楽しめるクラシックホテルの存在は、日光の価値向上に貢献している。

世界的ラグジュアリーホテル開業

日光には多数の宿泊施設があるが、中でも2020年の「ザ・リッツ・カールトン日光」の開業は、日光の歴史の中でもエポックメイキングな出来事の一つだろう。

木々に囲まれ穏やかな空気が流れる中禅寺湖畔は、かねて国際的な避暑地として栄えた。明治から昭和初期には、各国大使館の別荘が多く建てられた。1894年に建てられた「レーキサイドホテル(後の日光レークサイドホテル)」も、多くの外国人が滞在したリゾートホテルである。1966年に東武グループ入りしたものの、その後、シーズンによる繁閑差の大きさや、施設の老朽化といった理由で経営は徐々に厳しくなり、2016年1月に営業を休止。約120年の歴史に幕を閉じた。

その跡地をどのような宿泊施設とするか。世界からの誘客を視野に入れ、日光を新たな滞在型リゾートに変革するには、これまでにない宿泊施設が必要だった。熟慮の末、跡地には外資系ラグジュアリーホテルの



約100年前のレシピをアレンジした百年ライスカレー (提供：日光金谷ホテル)

誘致が決まった。

背景にはインバウンドの増加がある。2000年代初めには年間500万人余りだった訪日外国人旅行者数は、2006年以降に急増し、2016年には2,400万人を超えた。インバウンド需要を取り込むことで、日光は国際観光都市としてさらに昇華できる。集客力とブランド力を持った外資系ホテルを誘致すれば、日光は富裕層も満足する滞在型リゾートに一步近づく。こうしたホテルの存在は全体の価値向上につながり、日光は一層、魅力的なリゾート地となる。

外資系ホテルとしても、大都市以外に国際空港や新幹線駅へ1~2時間でアクセスできる地へのリゾートホテル建設を求めており、日光という地はそれらの条件に合致したのである。

ザ・リッツ・カールトンを運営するマリオット・インターナショナルは、世界最大のホテルチェーンである。

東武グループは1999年に同社と提携し、「コートヤード・マリオット銀座東武ホテル」(1987年開業の銀座東武ホテルが前身)を運営し、2020年には、札幌東武ホテルをフェアフィールド・バイ・マリオットにリブランドしている。しかし、ザ・リッツ・カールトンのようなラグジュアリーホテルを手掛けるのは初の試みとなる。室内・館内空間やサービスを含め、ラグジュアリーホテルの世界観の構築には、常に最上質が求められる。ホテル建設時には、デザインやコスト面において高いレベルのものを求められ、時に調整が難航することもあった。

一方で、外資系ホテルが持つ「海外からの視点」は、東武グループに多くの学びや気づきを与えた。例えば中禅寺湖畔は、厳寒期の国内観光客の利用は少なかったが、雪が降らない地域に住む外国人にとっては雪や寒さが貴重な経験になる。国や季



日光金谷ホテル 別館ROYAL HOUSE ロイヤルスイート (提供：日光金谷ホテル)



G7会合が行われたザ・リッツ・カールトンスイート(提供:ザ・リッツ・カールトン日光)

節ごとにアプローチを変えればオフシーズンがなくなり、通年での誘客が可能になるのは大きな発見だった。さらに、外資系ホテルの強大な顧客ネットワークを活用して、世界各国からの誘客も期待できる。

東武グループ初の外資系ラグジュアリーホテルの誘致は、観光地日光の魅力と価値を再確認するきっかけとなった。「日光の未来につなげていきたい」という思いで事業を進め、完成にたどり着いた。

開業は2020年7月15日。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で2カ月延期となった。しかし、マイクロツーリズムの浸透や三密^{※1}を回避できる国立公園内に位置することから国内富裕層の需要が高まり、業績は好調に推移した。

総客室数は94で、中禅寺湖や男体山の眺望が楽しめる。ダイニングの内装には鹿沼組子などの伝統工芸が取り入れられ、洗練された空間の

中に日光の地域性を感じさせる。ザ・リッツ・カールトンとして初の試みとなる温泉大浴場には日光湯元温泉の源泉を引き、ぜいたくな時間の過ごし方ができるホテルが誕生した。

国際会議誘致、世界に挑む日光

時を同じくして始まったのが、環境省が推進する「国立公園満喫プロジェクト」だ。日本の国立公園を世界水準の観光地にブラッシュアップし、インバウンド誘客の強化を図る施策である。この中で「上質な宿泊施設の誘致」の取り組み事例として、日光国立公園内にあるザ・リッツ・カールトン日光が挙げられた。滞在型リゾートの実現を目指す東武鉄道にとって大きな追い風となった。

2023年6月24・25日には、G7栃木県・日光男女共同参画・女性活躍担当大臣会合がザ・リッツ・カール

トン日光を会場に行われた。世界に日光をアピールする絶好の機会となった。

国際会議の誘致はホテル建設時から視野に入れていた。2016年の先進国首脳会議の会場となった三重県の志摩観光ホテルからのアドバイスを参考に、ホテルの規模と場所柄を考慮し宴会場の設置を見送る代わりに、「ザ・リッツ・カールトンスイート」(277㎡)を、会議など多目的に利用できるように設計した。実際にG7会合でもこの部屋やロビーラウンジがセッションやレセプションに使用され、参加国の要人にも好評を博した。

ザ・リッツ・カールトン日光の存在によって、日光の魅力はより一層ブラッシュアップされた。国内外からの誘客において、今後も強力な武器となる。その上質なサービスは他の施設にも大きな影響を及ぼし、日光全体のおもてなしのレベルを格段に向上させていこう。

サステナブルな観光を推進

豊富な自然に囲まれた日光では、脱炭素に向けた取り組みも加速する。2023年4月、ザ・リッツ・カールトン日光がある奥日光エリアが環境省の脱炭素先行地域に選定された。2030年のカーボンニュートラル^{※2}達成に向けて、東武鉄道、日光市、東京電力パワーグリッド栃木総支社の3者が提案したのは、「雲の上のサステナブルリゾート『奥日光』:多様な観光資源と脱炭素による地元アップデート」。脱炭素とレジリエンス

強化を進め、サステナブルツーリズムを基軸に観光業の活性化を狙う。並行して、東武グループでは2030年度の環境負荷低減目標として、奥日光エリアのカーボンニュートラルを掲げている。グループ施設の廃食用油を活用したバイオ燃料バスの運行や、ホテルなどでの再生可能エネルギーの導入を進めていく。

日光エリアで推進されているのが、環境配慮型の観光MaaS^{※3}「NIKKO MaaS」だ。2021年10月28日に開始されたサービスで、スマートフォンで鉄道・バスをセットにしたフリーパスのほか、浅草～東武日光・鬼怒川温泉間の特急券やSL大樹の座席指定券が購入可能だ。フリーパスは中禅寺湖・奥日光、鬼怒川温泉、湯西川温泉など日光エリア全域を対象に、東武日光駅や中禅寺温泉バスターミナルをハブとして、鉄道やバスを乗り継ぎながら各観光施設を周遊できる。さらには、EV・PHVカーシェアリングやシェアサイクルといったエコモビリティや、歴史・文

化施設の入場券、拝観券、体験・アクティビティも購入できる。

日光エリアの交通渋滞解消や温室効果ガスの排出削減は、国立公園を有する日光にとって大きな課題といえる。日光市への交通手段はマイカーが約8割を占め、都心部から約1.5～2時間でアクセスできる利便性もあり、鉄道・バスなど環境に優しい公共交通へのシフトを促すにはハードルが高い。NIKKO MaaSは、チケット購入や乗り継ぎ検索など、旅行をする上での煩わしさをスマートフォン1台で解決する。日光エリアでの旅行中の快適性を高め、公共交通へシフトを促し、課題解決への1つの解となっている。

NIKKO MaaSは全体統括を務める東武鉄道のほか、栃木県・JTB・JTBコミュニケーションデザイン・オリックス自動車・トヨタレンタリース栃木の官民連携で運営される。地元や他社との協創で地域振興を目指す。それが東武鉄道の志だ。

また、日光市は2024年4月1日、



館内には露天風呂付きの温泉大浴場を備える(提供:ザ・リッツ・カールトン日光)



NIKKO MaaSは日光エリアの移動や体験を網羅

※1 三密

日本の新型コロナウイルス感染症対策の一環として生まれた言葉で、「密閉(換気が悪い)」「密集(人が多い)」「密接(近距離での接触)」の3つの条件によって特徴づけられる状況のこと。

※2 カーボンニュートラル

二酸化炭素(CO₂)などの温室効果ガスを減らし、森林による吸収分などと相殺して実質的な排出量をゼロにすること。

※3 MaaS (Mobility as a Service)

複数の公共交通やそれ以外のモビリティを最適に組み合わせて検索・予約・決済を一括で行えるサービス。



ソファ席やカフェカウンターが並ぶコックピットラウンジ

日光市地域循環によるゼロカーボンシティ実現条例を施行した。NIKKO MaaSをはじめとする東武鉄道の観光戦略「国際エコリゾート」は、サステナブルなリゾート地の醸成に貢献し、日本の観光地の1つのモデルとなっている。

新型特急スペーシア X

2021年11月、東武鉄道は新型特急車両N100系の導入を発表した。日光・鬼怒川温泉エリアに乗り入れ、認知度も高い100系スペーシアから進化したフラッグシップモデルだ。フラッグシップモデルの投入は実に33年ぶりとなる。「コロナ禍から徐々に回復しつつある観光需要の喚起を

図りたい」という願いを込めて、2023年7月15日に「スペーシア X」として運行を開始した。

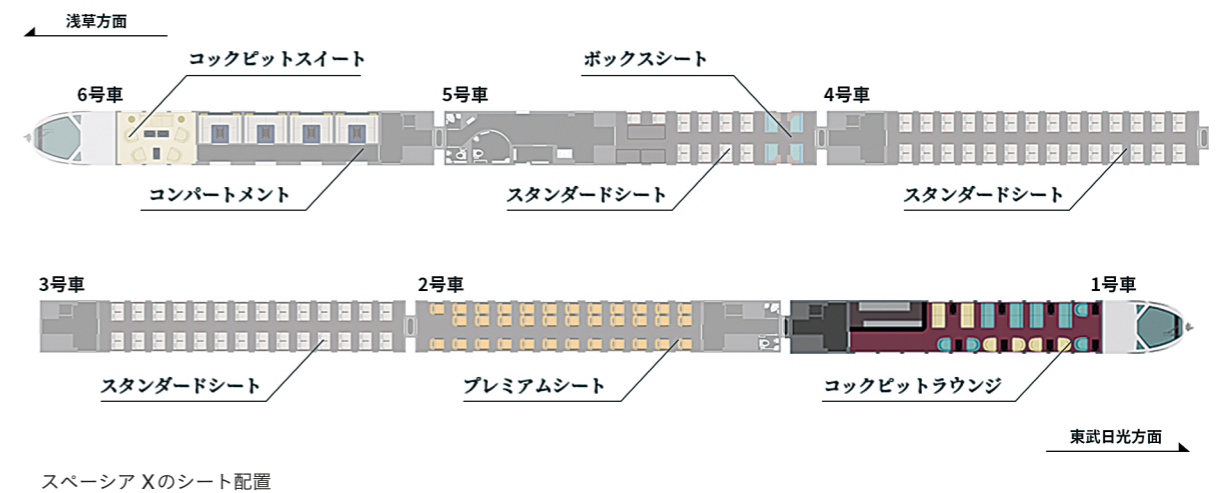
スペーシア Xのコンセプトは「Connect & Updatable ~その人、その時と、つながり続けるスペーシア~」。旅行のあり方が多様化する今、鉄道路線としてのつながりだけでなく、デザインや設備、車内の雰囲気、サービスなどから旅客に日光・鬼怒川温泉とのつながりを感じていただくことを強く意識して開発した。

名称にある「X」には旅体験(Experience)や文化・人々の交わり(クロス)、未知なる(X)可能性といった意味が込められている。窓枠にも「X」のデザインがあしらわれた。先頭車両は流線形で、車体は日光

東照宮で使われた「胡粉(ごふん)」をほうふつとさせる高貴な白で塗られ、まさにフラッグシップモデルたる堂々とした装いだ。六角形の窓枠は沿線の栃木県鹿沼市に伝わる「鹿沼組子」がモチーフとなっている。

また、スペーシア Xには五感に訴える仕掛けを随所に取り入れた。1号車・6号車のデッキの天井に設置された大型の液晶ディスプレイには、杉並木や木漏れ日、星空など日光や鬼怒川温泉の自然を連想させる映像が投影されている。乗車した瞬間から日光を感じられる演出だ。壁面には香りでも旅気分を盛り上げるアロマディフューザーを埋め込んだ。

また、環境への配慮として、モーター性能の向上などにより、CO₂排出量を最大40%削減。加えて、日光



鬼怒川エリアを運行する電車や浅草～東武日光・鬼怒川温泉間を運行する他の特急列車等と共に、使用電力相当分をすべて再生可能エネルギー由来の電力に実質的に置き換え、CO₂排出量を実質ゼロとする。

上質な体験でファン化

車両は6両編成で、国内最多となる6種類の座席で構成されるのが特

徴である。プライベートジェットをイメージした「コックピットスイート」は民鉄特急最大級の11㎡の広さを誇る。「コックピットラウンジ」は日光金谷ホテルや大使館別荘の内装がモチーフだ。1人用、2人用、4人用のソファが設置されている。カフェカウンターもあり、日光など地元の素材を生かした軽食や飲料が購入できる。個室利用のニーズに応えた「コンパートメント」、向かい合う2シートによる半個室の「ボックスシ

ート」、「プレミアムシート」は2列+1列と、座席がゆったりと配置された。最も席数の多い「スタンダードシート」は旅にもビジネスにも利用しやすい。

収益とコストのバランス、乗客の利便性や快適性といった様々な課題に対応するため、デザインコンセプトの決定から設計開始までには約1年を要した。

2編成12両で運行を開始し、4編成24両に増備した2024年3月のダイヤ改正では、1日の運行を6往復に増やした。乗車率は90%を超え、海外のエージェントからの問い合わせも多い。

旅行のニーズが多様化する中で、移動時間の充実や楽しさも重要なコンテンツとなる。スペーシア Xは上質な移動体験を提供する。その体験は確実に乗客の心をつかみ、リピート率アップにつながっている。

雄大な自然との共生、紡がれてきた歴史、新たな時代性や感覚を付加してつなぎながら、東武鉄道は日光を国際エコリゾートとして発展させる。



スペーシア Xの先頭車両